

日本災害看護学会 先遣隊活動報告

4月22日（土）の活動

活動者：渡邊智恵、寺田英子

当日の状況（2016年4月22日）

避難者数が9万人台で増減があまりなくなり、1回目の地震からは8日間経過し、2回目の本震を明日で1週間を迎えるという今日、晴天に恵まれ、多くの人や車・トラックが被災地内に入ってきた。同時に、不足していた救援物資は各避難所に行き渡るようになっていた。多くの支援が入る分、支援を受ける受援者の負担も大きく、ケア提供者の疲労がピークになる頃である。

昨日の大雨により、瓦礫の片付け等は進んでおらずニュースで見た風景を実際に現地でも同じ状況のままであることに驚愕をした。また、本日は天候が一転して晴天に恵まれたことと、ボランティアセンター開設に伴い、被災地には多くの人や救援物資等を搬送する車やトラックがいきかった。

1. 行程ならびに訪問先

- 7:00 ホテルを出発
- 10:00～11:30 日本赤十字社熊本県支部
- 13:00～13:20 益城町内避難所①の本部訪問
(4月16日、19日先遣隊が訪問した避難所)
- 13:30～14:00 益城町内避難所②訪問
- 14:10～16:40 益城町内避難所③でケア活動
- 20:30 ホテル到着

2. 活動内容

1) 日本赤十字社熊本県支部

日本赤十字社の熊本県支部で救護班の派遣に関する役割を担っている方からお話を伺った。1回目の地震時は九州ブロックの救護班による支援を受け、2回目の本震時に本社等を含めて医療救護班と県で協力をしながら避難所をフォローしていくことになった。それぞれにエリアを決めて避難所をローラー作戦で調査した結果、重点的に活動をする地域（阿蘇地域と御船町）を決めて継続して医療班を派遣している。医療救護班は自己完結型で活動をしており、持参したのものだけでは十分ではなかった医薬品（解熱剤や湿布等）については薬剤師会等と連携をして補給している。この活動は県や市、消防と情報を共有している。医療救護班が直後から応援に来ているが本日は11班が活動をしている。さらに院内の職員の43%が避難所や車中泊をしている現状があり、発災から継続して勤務している職員を休ませるため、21日からは病院支援も受けている。

この時期の健康問題として、車中泊によるエコノミークラス症候群に対しては、DVTで専門の人を21日より2名配置されて対応している。院内には17日から21日にかけて肺塞栓で入院治療をしている被災者もいて、エコー等を用いて検査をするようになり、チラシによる被災者への注意喚起（腫れや痛みの異常の早期発見と運動や水分摂取等）を含め、重点を置いて対応されていた。

ノロの疑いがある人が避難所にいたが、救護所内のベッドに隔離して対応ができ、ICTも入り衛生状態の維持管理に努めている。また、社会福祉協議会がボランティアセンターを開設したことにより、トイレの掃除やごみの整理や収集に関する作業をサポートし、避難所環境の改善に努めるようになってきた。WOCの看護師が介護の必要な人を振り分けるようになり、各専門家が入ってきたことにより、個別的なケアを受ける体制が整いつつある。

2) 益城町内避難所①の本部

益城町の避難所の総括をしているところに行き、現在、益城町内には17か所の避難所があること、避難者が多いところにはDMAT、JMAT、DPAT、自衛隊の救護所、災害支援ナースの派遣等があり、さまざまなケアニーズに対応していた。また、夜間等で健康問題があれば、医療チームが常駐している避難所に診察に行くようにしているということが語られた。

避難所内で人数が少ないところは、医療チームの派遣がなく、本部から避難所となっている小学校（益城町内避難所②）に行ってほしいと依頼を受けて、次の避難所に向かった。

こちらでは日本赤十字社からのボランティアが6-7人くらい本部に来て、次のような活動をしていた。車中泊の人たちが多いため、弾性ストッキングを配布する活動をし始めた。どこの避難所が優先度が高いのかを確認していたが、①車中泊の人数、②医療チームの有無、等を判断材料とされていた。すべての避難所に回ることも重要であるので、限なく配布できるよう役場の方が同行して避難所を回るようにしていた。ただ、昼間は不在のことが多く、効果的な配布方法（サイズは個別であり、それぞれに確認をしながら配布する）を検討する必要がある。

3) 益城町内避難所②

この避難所は本部から歩いて5分以内のところ、体育館が救援物資置き場、また各教室に避難者が入居していた。発災翌日からAMDが常駐しており、JMATの巡回や地域の医療機関の方が訪問をしてフォローしていた。この距離であっても本部がこの避難所の情報を把握できていない状況があり、日々避難所の状況が変わる中で全体概要を把握することは困難を極めることが理解できた。

4) 益城町内避難所③

本部から 10 分くらい離れたところにこの避難所があった。幼稚園が避難所になっており、保健福祉センターには入れなかった人やこの近所の被災者約 80 人が自然に集まり、園長の理解を得て住民同士が協力して、この避難所を運営していた。昨日救援物資が各地から搬送され、園長の努力により確保できていた。医療チームは常駐しておらず（昨日は巡回診療があった）、私達が行くと、見てほしいと数名が集まってきた。この避難所に一定期間滞在して、看護活動を展開しながら状況を把握した。

ここでの健康問題としては、①臨月の妊婦（8 人目の出産）、②右股関節痛を訴える女兒（トイレ介助が必要）、③腹痛、④外傷（地震による外傷で消毒を希望）3 名、であった。昼間だったので 30 名くらいしかいなかったが、幼稚園の職員の方々が避難者のケアを発災後、自宅に帰ることなくされて疲労が蓄積していた。①の妊婦は今月 27 日が出産予定日で、8 人目となる子どもの出産であり、陣痛が始まったらすぐに救急車で医療機関に行くようにすることを不安に思っておられた。傾聴しながら、対応について説明するとともに、翌日以降も巡回をしていくことができるように本部に報告した。②の女兒に対しては、発症経過を問診し、ケアマットレスや持参されたマット等を活用して痛みが取れる環境づくりを行い、このケースについても本部報告をした。③ケア提供者であり、便秘に傾いていること等が語られた。④の高齢者は地震時にいろいろな家具等が転倒して負傷したもので、顔や左下腿、右肩等を強打したという。医療機関に受診しており、抗生剤を継続して内服することを確認した。この方は、夜は熟眠できるように睡眠薬を内服していたが、夜間に発生した 2 回目の本震を経験したことにより、熟睡していると避難ができないので内服するのを中止していた。余震が収まれば内服できること、昼間少し寝ることはできるのでと気丈に語られた。この高齢の避難者が入居している部屋はトイレから近く段差もなく、教室の中に 4 家族位のみであり、トイレにも自力で行くことができおり比較的落ち着いて被災時の状況を思う存分に語られた。④のその他の 2 名は、地震時にガラス等で足の裏や甲を負傷していた。

この幼稚園には子どものいる家族が入居しているため、災害時の子どもの反応とその対応について、チラシを用いて説明を行った。幼稚園の先生方は、災害後の子どもたちに退行現象があることに対して大きく頷かれた。

3. 課題

外部支援が本格的になってきており、全体の動きを把握していくことが必要となるが、それぞれの避難所支援に精一杯の状況があり、連携が困難な状況がある。

避難所の状況が刻々と変化しており、その状態を継続して把握できるシス

テムが必要となる。

被災地内のケア提供者である行政、医療従事者や避難所運営を自発的に行っている学校・幼稚園の先生方の疲労が蓄積しており、「被災地内の救援者を疲弊させない」ということが、今後の復興に向けて重要な課題である。

余震が続くことにより、自宅に帰れない、あるいは部屋の中では避難がすぐにできないと車中泊をしている人が多いため、そのための健康問題への対応策を効果的に講じていく必要がある。

避難所内に子どもたちがいるが、通常の学校生活が早期に復帰できるようにすることが求められる。

4. おわりに

避難者生活が長期化する可能性があり、その避難所環境をいかに改善することができるか、多くの外部支援が入ってくる中で、被災地内の人に負担をかけない支援をすることが求められる時期である。外部支援に入る前には、自分たちの思いだけでなく、被災された方々が必要としていることを考え、声を聞いて支援をすることが重要である。